日本文化学講義（ウェブ公開用資料）
「モデル小説」からみる
プライヴァシーの近代
日比 嘉高

第14回 「モデル問題」の登場 内田魯庵「破垣」の発禁 3

社会小説、スキャンダリズム、筆誅……
「破垣」を、同時代の文脈の中から読む。

1 「破垣」の発禁

1・1 発禁の経緯

■引用1■ 「〇彙報 司法及警察」（「官報」第五二五一号、一九〇一年一月七日）、21頁

「〇発売頒布停止 東京府東京市ニ於テ発行ノ文芸倶楽部第七巻第一号ハ風俗ヲ壊乱スルモノト認メ新聞紙条例第二十三条ニ依リ本月四日内務大臣ニ於テ其発売頒布ヲ停止シ仮ニ之ヲ差押ヘタリ」。

▼ 発禁の噂

■引用2■ 内田魯庵「『破垣』に就て」（『創作苦心談』新声社、一九〇一年三月、所収）、274頁

「些か口外は憚る事もあつてお話し出来ませんが、妙な説を立た人もありますよ」

■引用3■ 同「『暮の廿八日』其他」（『早稲田文学』第240号、一九二六年一月）、203頁。

「時の内相某が自分の秘密をスツパ抜かれたといふので甚だ不機嫌であつたのを屬僚が意を嚮へて禁止したといふ噂があつた。確かな筋から洩れ聞えたので万更虚聞でもなさゝうだつたが、若し果して然うだつたら迷惑至極である。此作は或る外国の詰らぬ小説からヒントを得て、偶々聞込んだ某氏の家庭の紊乱に結び付けて書いたので、私が知りもしない当の内相の家庭の秘話などゝ憶測されるのは飛んでも無い見当違ひである。」

↪ 「男爵」＝末松謙澄？

▼「破垣」の表現

■引用4■ 「破垣」

此家の殿様といふは維新後間もなく物故した西国某藩の名士の遺孤（あと）で、藩侯の費用で早くから欧洲に留学し、帰朝してからは枢要の位置に抜擢され暫らく官海の急瀾怒濤を藩閥の大船に乗つて安々と渡つて来たが、亡父（なきちゝ）が曾て国事に奔走した遺功と己れが暫らく元老諸侯の帷幕に参画した功労とでツイ此頃男爵を賜はり今では貴族院議員の閑

散を楽んでゐる左も右くも名士の株である。夫人といふは藩の老職の娘で［…］（248頁）

▼ 末松謙澄（1855-1920）の略歴　（『朝日日本歴史人物事典』より）

明治大正時代の官僚、政治家。号は青萍。幼名は線松。豊前国小倉藩京都郡前田村（福岡県行橋市）の大庄屋・末松房澄・伸子の4男。［…］『東京日日新聞』の日報社に記者として入り、社長の福地源一郎に認められ、社説の執筆者（筆名・笹波萍二）に登用された。8年、福地の紹介で伊藤博文の知遇を得、官界に転じた。11年、英国公使館付となり渡英、ケンブリッジ大学在学中に日本の古典『源氏物語』を英訳、出版した（1882）。19年帰国。内務省参事官を経て県治局長。演劇改良会を組織し天覧劇を演出。英国女流作家バーサ・クレイの小説を翻訳して、『谷間の姫百合』を出版した。［…］22年伊藤博文の次女生子と結婚。第1回総選挙に福岡県から出馬し連続3期当選した。法制局長官、貴族院議員を務め、逓信大臣、内務大臣を歴任。日露戦争（1904〜05）中は英国に駐在し戦時外交に尽くした。帰国後、枢密顧問官。子爵。帝国学士院会員に挙げられた。30年、毛利家歴史編輯所総裁を委嘱され、23年後に『修訂・防長回天史』12巻を脱稿した。［…］（玉江彦太郎）

福岡県の大庄屋の子に生まれ、九年間のロンドン留学、内務省参事官、衆議院議員、逓信大臣、内務大臣と歴任、「ツイ此頃」の一八九五年には男爵の爵位をうけ、翌年貴族院議員となる。また彼の妻は、「藩の老職の」ではないが、時の総理大臣伊藤博文の娘、生子であった。

末松謙澄

1・2　魯庵の反応

発禁処分に対し、魯庵は激しく抗議した。

【資料1】「『破垣』発売停止に就き当路者及び江湖に告ぐ」
（『二六新報』一九〇一年一月一〇〜一七日）

↪　なぜこうした小説を書いたかがわかる

2　「破垣」の社会的文脈

2・1　「社会小説論」とそれを産み出した機運

▼「社会小説論」

『国民之友』の「社会小説出版予告」（三二〇号、一八九六年一〇月）をきっかけに交わされた議論。社会の下層を書け、社会の全体を書け、社会を主とし個人を従とする小説を書け、などと主張された。

▼ 背後の機運

■引用5■ 石崎等「魯庵とその時代」『文学』一九八六年八月

「社会の堕落を好んで暴いてみるという傾向は、ひとり魯庵だけのものではなく、明治三〇年代文学の一般的な特徴でもあった。ひと言でいえば、それは〈近代〉の進展にともなう社会的な諸矛盾の増大に対して、作家が視野を拡げてそれに対応しようとしたことの表われである。」

■引用6■ 山田博光「社会小説論――その源流と展開――」『日本近代文学』一九六七年一一月

社会小説論の源流の一つとしてあるのが「「社会の罪」という人間観であり、文学観である。これは、貧乏のために人が盗みや売春のような罪をおかしたとき、その人をそのような窮地に追いつめた社会にこそ罪があるという人間観であり、そのような見方で社会と個人との関係を、文学に描けという文学観である。」

■引用7■ 無署名「〔所謂社会小説〕」『早稲田文学』一九〇七年二月

「斯かる〔社会小説についての〕議論の影響か、はた他の原因に由るか、／近来注意すべきは一種の、／◎諷刺小説の流行　なり」

- 「風紀革新」「矯風会」などの社会浄化運動のブーム
- 社会小説は、ある種の写実小説への指向でもあった

2・2　ジャーナリズムとの連関――暴露、筆誅、スキャンダリズム

【資料2】「弊風一斑　蓄妾の実例」（『万朝報』一八九八年七～九月）に連載

・スキャンダルの頒布は、相互監視の目、読者＝同質な想像の共同体を浮上させる。
・スキャンダルとは規範を前提にした侵犯の批判／愉しみである。

魯庵の嘲世諷俗の文学は、〈公人の不適切な私行を暴露する〉という侵犯性を売り物にしていた点において、『万朝報』の「畜妾の実例」などと軌を一にしていた。諷刺し批判をするが、暴露という快楽を駆動力にする。
ただし、登場人物を造形し、動かせるのが小説の能力であり、その他の言説（新聞雑誌記事など）との差違となる。

3　一九〇〇年前後の〈私的領域〉と文学表現

- 末松謙澄の〈私的領域〉を暴いたかどうかは、真偽不明。またその穿鑿にあまり意味はない。
- むしろ見えてくるのは、
  - ◇「社会」を表象の対象とし、それを通じて〈矯風〉しようという動向
  - ◇その一環としての小説の革新
  - ◇筆誅という名を借りたメディアの暴露趣味
- 諷刺小説の表象の結果、人物・社会の裏面＝悪しき〈私的領域〉が構成される（逆ではない）。〈私〉を〈公〉へと転形する小説という回路。
- ただし、この時期の魯庵の小説に内面描写の深化はない。

類型性（【資料3】）／江戸的な観察の伝統（★1）／類型的でもモデル問題は起った（★2）

★1

■引用8■ 中野三敏「痩々亭骨皮道人『浮世写真　百人百色（抄）　校注」（『新日本古典文学大系 明治編29風刺文学集』岩波書店、二〇〇五年一〇月）

「その内容は緒言に述べる通り、維新以後二十年ほどの間に一斉に展開し始めた新しい社会現象の数々を、百通りの業態や性癖として捉えて、その粗探しを試み、各章末に短評を付したもので、その表現手法は式亭三馬が晩年得意とした百癖・百馬鹿ものというべき短編風俗時評的な筆法を以てする。[…] このスタイルは早く浮世草子の気質ものに始まり自堕落先生・風来山人・山東京伝の後をうけて三馬によって完成され、以後多くの追随者を生みつつ明治期に至る伝統的なものである。」p.210

★2

■引用9■ 「文士の徳義」『日本』一八九九年六月六日

「●文士の徳義　小説家が著作中の人物材料の選択は固と小説家が自由に属す〔。〕然れども若し彼にして其模型を友人知己の間に取れる際〔、〕之れを辱かしむるが如き仕組を為さば〔、〕彼は即ち人間の徳義を忘却せるものと云ふべし〔。〕小説家とて人間徳義以下に蠢動する劣等の動物にもあらざる以上は〔、〕亦人間並に其徳義を守らざる可らず〔。〕曩きに柳浪が一小説に於て湖処子とやらんを描きしといふ噂ありしが、頃者太陽紙上にかゝげし不知庵の落紅なる一小説は〔、〕作家知己の人物を其まゝに取りつゝ而も其人物に侮辱を加ふべき事件を付着せりとの評ありて文界一隅の物論を買へり〔。〕吾人は必らずしも不知庵が不徳を証明し得るものに非ずと雖も〔、〕他をして爾かく叫ばしむる程の書きぶりは亦単に偶然のこととも領しがたし〔。〕吾人は此件に関し不知庵が徳義上弁明の責任あることを勧告すると共に〔、〕更に広く作家の注意を喚起す」

――その他にも

○「女先生」と下田歌子

○「くれの廿八日」と二葉亭四迷

4　作品の読解との交差――まとめをかねて

- 「破垣」というメタファー
  - ◇隠された悪行の暴露。蔽いの破れ目。
  - ◇矯風会と「花の博士」との垣根の破れ目。清廉と淫蕩の境界の破れ。
  - ◇作中人物への露見は先生への告訴の場面で形象化されるが、同時に読者・社会への暴露ともなっている。
- 〈破垣〉を小説に書くことは、〈破れた垣〉の発見ではない。それは〈破れた垣根〉の構築である。

＊

- 小説と〈公〉／〈私〉
- 表面と障壁と裏面とを打ち立てるのが小説
- この意味で小説は、社会・人間の反映ではなく、弁証法的に社会・人間の構築自体に関わる